竹中 烈（Takeshi TAKENAKA）

学位：修士（教育学）

略歴：京都大学大学院教育学研究科博士前期（修士）課程修了

京都大学大学院教育学研究科博士後期課程指導認定退学

京都大学教育学研究科研修員

専門分野：教育社会学、感情社会学

研究課題：日本における公教育とオルタナティブ教育との関係性

不登校生の居場所にみられる場の特殊性の検討

【著書】

・「フリースクールとして在り続けるためにー運営資金調達の困難性ー」（武井哲郎・矢野良晃・橋本あかね編著『不登校の子どもとフリースクール　持続可能な居場所づくりのために』晃洋書房、2022 年 10 月）

・伊藤潔志編著『哲学する教育原理』（「4－1　子どもの発見」部分（保育出版社、2017 年 3 月）

【論文】

・「不登校言説の現代的位相 ― 不登校各種実態調査結果をふまえて ―」（『愛知文教大学比較文化研究』第 17 号、2023 年）

・「拡張する教育空間における民間事業者の位置 ― セーフティネットとしてのフリースクールに着目して」（『日本教育政策学会年報』第 29 号、2022 年、武井哲郎・矢野良晃・橋本あかね・竹中烈・宋美蘭による共著）

・「ソーシャルベンチャーによる官民協働の不登校生の居場所づくりの特質 ― ＜界＞における関与者間の関係構造の変容に着目して ―」（『教育支援協働学研究』vol.3、2021 年）

・「精神医療技法としてのオープンダイアローグの可能性 ― 不登校支援への適用可能性という視点から ―」（（『愛知文教大学比較文化研究』第 16 号、2021 年））

・「不登校支援に対する学校教員の意識 ― 教育相談における困りごと事例の分析を通して ―」（『愛知文教大学論叢』第 22 巻、2019 年）

・「ソーシャルベンチャーの思想 ― 不登校支援の市場化、もしくは新しい協働を見据えて ―」（『愛知文教大学比較文化研究』第 14 号、2018 年）

・「後期近代社会におけるフリースクール運動 ―「教育機会確保法」の成立に着目して ―」（『愛知文教大学論叢』第 20 巻、2017 年）

・「生徒指導における教師-生徒間の信頼という概念の検討」（『教育研究』7 号、2017 年）

・「フリースクールにおけるスタッフ・子ども・親の『感情統制の三極関係』―『FS 的自己』としての親を起点として ―」（『人間関係学研究』第 21 巻第 1 号、2016 年）

・「インクルーシブな共生社会に向けた統合と包摂のせめぎあい ― 公教育制度にフリースクールは位置づけられるのか ―」（『教育と医学』第 64 巻 7 号、2016 年）
・「不登校生の居場所ネットワーク設立者の実践及び教育思想に関する一考察 ― 奥地圭子・八杉晴実・宮澤保夫の自著を手掛かりとして ―」（『教育研究』6 号、2016 年）
・「SNS に見る子どもの対人コミュニケーションについての一考察 ― チャムグループ化する仲間集団、共依存症的な対人関係 ―」（『チャイルドサイエンス』12 号、2016 年）
・「変化する『居場所』、多様化する『居場所』― 新たな学校のあり方を考える ―」（『児童心理』2 月号増刊、2016 年）
・「インクルーシブ教育システムの中で求められる教師の専門性に関する一考察 ― 不登校の子を持つ保護者の声を通して ―」（『愛知文教大学論叢』18 巻、2015 年）
・「不登校経験者へのメッセージとしての多様なライフストーリー ― Fonte に連載された著名人インタビューを手がかかりに」（『教育・社会・文化』14 号、2013 年）
・「フリースクールにおける学習支援 ― 学習支援ニーズの高まりと居場所づくり ―」（『教育・社会・文化』13 号、2012 年）
・「フリースクールにおける相互行為にみるスタッフの感情管理戦略」（『フォーラム現代社会学』11 号、2012 年）
・「不登校支援現場に見る感情労働 ― 専門性が求められる不登校生の居場所に着目し ―」（『京都大学教育学研究科紀要』57 号、2011 年）

【その他】
・「中間支援組織を通した AS/FS 間の関係性の変容」（日本教育学会第 81 回大会ラウンドテーブル発表、2022 年）
・「オルタナティブスクールにおける「学び」の多様性と標準化-教育機会確保法後のオルタナティブスクールが置かれる現状に着目して - 」（日本教育社会学会第 74 回大会口頭発表、2022 年）
・「地方都市における学校外の不登校生の居場所の官民協働に関する一考察 ― 中間支援組織という概念を糸口に ―」（日本教育社会学会第 73 回大会口頭発表、2021 年）
・「学校教員がもつ学校外の居場所に関する意識について」（日本教育社会学会第 71 回大会口頭発表、2019 年）
・「フリースクール的な価値を基にした不登校支援の実際 ― ソーシャルベンチャーNPO 団体が運営する教育支援センターを事例として」（日本教育社会学会第 70 回大会口頭発表、2018 年）
・「オルタナティブな学びの場のネットワーク論的考察 ― 不登校生の居場所としてのフリースクールを中心として ―」（日本教育社会学会第 68 回大会口頭発表、2016 年）
・「『繋がり』を考える ― 特別の教科としての道徳を見据えて ―」（愛知文教大学教職センター通信 23、2016 年）
・「親の会を通してみるフリースクールの感情統制構造 ― 感情統制の三極関係を下敷きに ―」（関西

社会学会第 66 回大会口頭発表、2015 年）

・「不登校生の親のフリースクール運営への参与過程 ― 親の会の盛り上がりと意識変容を通して ―」（日本教育社会学会第 66 回大会口頭発表、2014 年）

・「不登校経験者へのメッセージとしての多様なライフストーリー ― Fonte に連載された著名人インタビューを手がかかりに」（Children, Education, and Youth in Imperial Japan 1925-1945, verbal presentation, 2014）

・「フリースクールにおける学習指導偏重化とその背景」（日本教育社会学会第 65 回大会口頭発表、2013 年）

・「フリースクールにおける学習支援」（日本教育社会学会第 64 回大会口頭発表、2012 年）

・「フリースクールの公教育化」（日本教育社会学会第 63 回大会口頭発表、2011 年）

・時事通信出版主催学内講座「教育原理」担当（2015 年～，名古屋学芸大学・大阪大谷大学・愛知淑徳大学・京都外国語大学等にて）

【社会活動】

・教員免許状更新講習における講座担当（必修科目「授業づくり・学校づくりに活かす教育の最新事情」を一部担当、選択科目「不登校問題を見据えた学校・学校外の居場所の来し方行く末」を主担当）（2020 年8月5日、6日）

・「自己肯定感と子どもの育ち」（尾張旭市思春期家庭教育講座［前期］、2019 年 6 月 12 日）

・「子供の自己肯定感はどのように育まれるのか」（愛知文教大学公開講座、2018 年 1 月 18 日）

・外語学院アドバンスアカデミーにて愛知文教大学体験講義（2017 年 1 月 24 日）

・「基本の話 ― 学校ってなんだろう」（愛知文教大学公開講座、2015 年 11 月 19 日）

・一般財団法人こまき市民文化財団理事（2020 年 4 月 1 日～）

・小牧市社会教育委員（会長）（2019 年 4 月 1 日～）

※小牧市生涯学習審議会委員および小牧市公民館公民館運営審議会委員を兼務（2016 年 4 月 1 日～）

※小牧市教育振興基本計画推進会議委員を兼務（2020 年 4 月 1 日～）

・小牧市国際交流協会委員（2018 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日）

・小牧市市民活動促進委員会委員（2017 年 4 月 1 日～）

・小牧市社会教育委員（副会長）（2016 年 4 月 1 日～2019 年 3 月 31 日）

【研究資金獲得状況】

・2018–2020 年度科学研究費助成事業若手研究(B)「学校外の不登校生の居場所に関する知識が学校教員の不登校指導に与える影響」（課題番号 18K13098、研究代表者）

・2020–2022 年度科学研究費助成事業基盤研究(C)「オルタナティブ教育の中間支援組織に関する横断的・縦断的研究」（課題番号 20K02440、研究分担者）

・2020 年度児童少年の健全育成実践的研究助成（1 年助成）「非営利型民間フリースクールの経営戦略

に関する開発的研究」（共同研究者）

・2021-2024 年度科学研究費助成事業基盤研究(C)「オルタナティブ教育における教育内容の質保証を見据えた官民協働モデルの開発的研究」（課題番号 21K02288、研究代表者）

・2022-2024 年度科学研究費助成事業基盤研究(C)「「非営利型」民間フリースクールの持続可能な運営システムの解明と検証」（課題番号 22K02244、研究分担者）

令和 5（2023）年度ティーチングポートフォリオ

氏　名	竹中　烈	職位／役職	准教授

1. 教育の理念

本学人文学部人文学科「教員養成プログラム」では、教員として求められる専門的な知識とともに、インターンシップ等で 1 年次から教育現場における体験を積むことで、実践的な教育技能と社会的な力の修得を目指している。教育現場、ひいては社会で対面する人・物・事の背景には思想や文化、生活史が根付いており、その理解が欠かせない。教師に求められる資質の形成にも同様のことが言える。学生には、そういった背景にアクセスし、自己省察をしながら新たな価値を創造していくための「対話力」「批判的思考力」、それを下支えする「社会や教育に関わる教養」を身に着けてほしいと考えている。

2. 教育活動の内容

＜2022 年度担当授業科目＞

・教育原論　・教育の制度と経営（教育課程の意義及び編成を含む）
・生徒指導論（進路指導及びキャリア教育を含む）
・教育相談論（進路指導及びキャリア教育を含む）
・教育実習事前事後指導　・教育実習　・教育インターンシップ B　・教育研究 B
・アカデミアゼミ A/B/C/D（卒業研究）
・教育原理（短大）　・生徒指導論（短大・部分担当）
・教育関係法規・教育課程の意義及び編成の方法（短大・部分担当）

＜2023 年度担当授業科目＞

・教育原論　・教育の制度と経営（教育課程の意義及び編成を含む）
・生徒指導論（進路指導及びキャリア教育を含む）
・教育相談論（進路指導及びキャリア教育を含む）
・教育実習事前事後指導　・教育実習　・教育インターンシップ B
・アカデミアゼミ A/B/C/D（卒業研究）　・ことばと多文化教育
・教育原理（短大）　・生徒指導論（短大）　・教職・教育制度論（短大・部分担当）
・教育関係法規・教育課程の意義及び編成の方法（短大・部分担当）

＜学生指導＞

・2022 年度は 3 名の学生（ゼミ生 6 名中）の卒業論文指導を行った。
・2022 年度は部活動顧問（「資格取得からまな部」）を務めた。
・2022 年度小学校体験活動及び文教子どもフェスタでの学生指導に関わった。

＜公開講座＞

・学び合う学び研究所セミナーの一環で、2022 年 6 月に現職教員及び教員経験者を対象として「不登校児童生徒の学びをどう保障するか～学校外の学びの場の現状をふまえながら～」という演題にて、不登校問題や支援体制の現況について講演を行った。

3. 教育の方法

社会事象を複眼的に捉えるという自身の専門領域である「教育社会学」の強みを活かして、各講座では時事的トピック（新聞やニュース、SNS 等で多く取り上げられている事柄）を導入に用いて、そこから教育の現状や価値観、課題認識について協働学習や対話を通して考察していけるような構成を意識している。学校現場は、社会の様々なニーズや批判が集約される場でもあり、同一の社会事象であっても、立場によって様々な捉え方ができるのであって、その多様性をふまえて自身の考えをもつことは非常に重要である。

また「教育原理」では、「ライフヒストリーを物語る」という主題で、学生に教員志望動機を持つに至るまでの自身のライフヒストリーをプレゼンテーションさせている。「教育の制度と経営（教育課程の意義及び編成を含む）」では、非一条校である「学校」の教育内容について、グループでプロジェクトを立て調べ、発表を行う。いずれにしても、自身の「教育経験」やそれに伴う価値や態度を相対化させ、異なる他者を前提とした「対話力」や「批判的思考力」を身に着けさせるための取組である。

加えて、全ての講義において、Google クラスルームを用いたコメントシートのやり取りを行っている。学生のコメントを受けて、内容を展開させるための新たな問いや論点を教師コメントとして意識的に厚く付けるようにしており、それをふまえて学生自身が思索を深めてほしいと考えている。

4. 教育活動の成果・評価と改善方策

2022 年度授業調査アンケートの結果をみると、概ね良い結果であり、特に前述した Google クラスルームを用いたコメントシートのやり取りについて好意的に評する自由記述も散見された。学生は、こちらが想像している以上に個別具体的な対応ニーズを持っていることの裏返しであろう。一方で、事前事後学習の取組時間のばらつきが見られたこと、特にアカデミアゼミの指導において、個別にきめ細かく実施できたことは成果ではあるが、テーマ設定や個人の能力によって指導量の濃淡が生じたことは反省すべき点である。これらをふまえて、学生同士の学び合い（グループでの取り組み）、グループパフォーマンスに対する教員フィードバックの充実を意識して取り入れ、全ての学生にとって満足できるようなあり方を模索したい。

5. 今後の目標

前述した学生同士の学び合い（グループでの取り組み）、グループパフォーマンスに対する教員フィードバックの充実を意識して取り入れるためには、グループごとに取り組める明示的かつ効果的な作業課題、それに伴う取り組みの方法を精緻に準備しておく必要がある。授業トピックについて、普段から絶え間なく情報収集を行い、教師自身が思索を深めておくことは必須であろう。また自身の研究内容を汎化し、講義の中でも積極的に取り入れていけるような模索も引き続き取り組んでいきたい。